



伝統は守るだけではなく、進化させていくことが大事なんです。



〔右ページ〕1.直径30cmほどのミニ和傘作りが体験できる。サイズこそ小さいが、材料は本格的。季節のしつらいに飾るほか、贈り物として贈るキットも別売している。2.傘の骨にのりを塗る。3.紙を貼り、骨の間の隙間がないように、ヘラで押しつけていく。4.余分な紙を切る。5.和紙に折り目を付ける。ひとつひとつが手仕事だ。6.出来上がり。専用の布袋と箱が用意されているので、お土産にも喜ばれそう。7.1階の店では、こんな強い和傘も買える。8.和傘の骨組みは1本の竹を何十本にも縦向きに刺したものだ。だから開いたときにきれいに収まるのだ。(左ページ)西塚琢太郎さんは、真縁の実家を継ぐ形でこの世界に入っておよそ30年。革新的なデザインに代わって60年にわたってのれんを守り続けた経験に、昨年、後を任された。「伝統は守るだけではなく、今の時代に合わせて進化しなければ」と、和傘の技術を生かした新商品の開発や、後進の育成にも意欲を熱やす。



西洋で手習い、「日吉屋」で

京和傘

和傘が一般に広く普及したのは江戸中期以降のこと。陽に透かしたときの整然と並ぶ骨組みや和紙の味わいは、それは美しいものですが、陽の下ですともっとも仕事の良し悪しがかかると思います。伝統の和傘職人は数えるほどとなった今、京都でも和傘製造

を創るのは「日吉屋」のみ。工房を見学でも、運がよければ「日吉屋」のたわぶ茶道家元御用達の木式野点傘や歌舞伎の舞傘などの製造過程が見られるかもしれません。向かいの「入形寺 宝徳寺」の境内を借りて乾燥のために並べられた傘の花は「見の価値あり」です。